

■ 1. 橋本裕之（はしもと・ひろゆき）プロフィール

盛岡大学ホームページより <http://www.morioka-u.ac.jp/UV/kyouin/hashimoto1.html>

盛岡大学 文学部 日本文学科教授

■ 学歴

1985年 3月 早稲田大学第一文学部演劇専修卒業  
1987年 3月 早稲田大学大学院文学研究科修士課程芸術学（演劇）  
専攻修了  
1985年 6月 博士（文学）（早稲田大学）取得  
略歴  
1988年 1月 国立歴史民俗博物館民俗研究部社会伝承研究部門助手  
（～1997年3月）  
1992年 4月 埼玉大学教養学部非常勤講師（～1994年3月）  
1992年 4月 東京情報大学経営情報学部非常勤講師（～1994年8月）  
1993年 4月 早稲田大学第一文学部・第二文学部非常勤講師（～  
1994年3月）  
1994年 4月 千葉大学文学部非常勤講師（～1994年8月）  
1994年 9月 プリンストン大学東洋学部客員研究員（～1995年8月）  
1995年 9月 プリンストン大学東洋学部客員講師（～1996年1月）  
1996年 4月 東京情報大学経営情報学部非常勤講師（～1997年3月）  
1996年 4月 千葉大学文学部非常勤講師（～1998年3月）  
1997年 4月 国立歴史民俗博物館民俗研究部社会伝承研究部門助教  
授（～1998年3月）  
1997年 4月 東京大学教養学部非常勤講師（～1998年3月）  
1997年 8月 インディアナ大学民俗学研究所客員研究員（～1998  
年1月）  
1998年 4月 千葉大学文学部日本文化学科助教授（～2005年3月）  
1998年 9月 ミシガン大学日本研究センタートヨタ客員教授（～  
1999年2月）  
1999年 3月 ミシガン大学日本研究センター客員研究員（～1999  
年8月）  
2000年 4月 成城大学文芸学部非常勤講師（～2002年3月）  
2000年 12月 大阪大学大学院文学研究科・文学部非常勤講師（集  
中講義）  
2001年 4月 早稲田大学第二文学部非常勤講師（～2002年8月）

2001年 12月 立教大学全学共通カリキュラム運営センター非常勤  
講師（集中講義）  
2002年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻  
非常勤講師（～2002年8月）  
2002年 8月 アイオワ大学人類学部客員准教授（～2003年3月）  
2002年 8月 グリンネル大学日本学部客員教授（～2002年12月）  
2003年 8月 沖縄国際大学総合文化学部非常勤講師（集中講義）  
2005年 4月 千葉大学文学部日本文化学科教授（～2008年3月）  
2005年 9月 日本橋学館大学人文経営学部非常勤講師（～2006年3  
月）  
2005年 12月 沖縄県立芸術大学教養科目非常勤講師（集中講義）  
2006年 9月 東京芸術大学非常勤講師（集中講義）  
2008年 4月 盛岡大学文学部日本文学科教授（～現在）  
2008年 4月 福山大学人間文化学部人間文化学科客員教授（～現在）  
2008年 9月 兵庫教育大学大学院学校教育研究科非常勤講師（集中  
講義）  
2009年 9月 兵庫教育大学大学院学校教育研究科非常勤講師（集中  
講義）  
2010年 4月 岩手大学人文社会科学部非常勤講師（～現在）

学位 博士（文学）

専門分野 演劇学・民俗学

■ 研究課題

古代・中世芸能の精神的的研究  
民俗学・民俗芸能研究の思想史的研究  
民俗芸能・大衆芸能の身体技法に関する民俗誌的研究  
民俗芸能の社会的基礎に関する民俗誌的研究  
博物館の表象と実践に関する民俗誌的研究  
マーシャル諸島の芸能に関する歴史人類学的研究

主な業績

著書

『春日若宮おん祭と奈良のコスモロジー』（象徴と世界観研究叢書第  
2巻）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1986年3  
月、1-114頁。

『王の舞の民俗学的研究』、ひつじ書房、1997年2月、1-538頁。  
編著『目からウロコの民俗学-あのしきたりには、こんな意味があつたのか!?!』、PHPエディターズ・グループ、2002年3月、1-327頁。  
『演技の精神史-中世芸能の言説と身体』、岩波書店、2003年2月、1-301頁。

Guest Editors, Topics in Japanese Folklore Studies, with Scott Schnell, Asian Folklore Studies 62, 2003, 185-321.

橋本裕之・垣東敏博編『若狭路の祭りと芸能』(錦耕三遺稿集 I)、若狭路文化研究会/岩田書院、2005年3月、1-555頁。

橋本裕之・垣東敏博編『王の舞舞踊譜』(錦耕三遺稿集別冊)、若狭路文化研究会/岩田書院、2005年3月、1-155頁。

監修・執筆『心をそだてる子ども歳時記 12 か月』、講談社、2005年10月、1-119頁。

橋本裕之・垣東敏博編『若狭路の暮らしと民俗』(錦耕三遺稿集 II)、若狭路文化研究会/岩田書院、2006年3月、1-531頁。

『民俗芸能研究という神話』、森話社、2006年5月、1-317頁。

#### 論文

「愛と慈しみの神楽」『花巻市文化財調査報告書』第3集、花巻市教育委員会、2009年3月、19-26頁。

「奇跡の大日堂舞楽」『上津野』35号、鹿角市文化財保護協会、2010年3月、6-16頁。

#### ■学会・社会活動

民俗芸能学会

日本民俗学会

藝能史研究會

日本文化人類学会

楽劇学会

儀礼文化学会

日本オセアニア学会

日本演劇学会

American Folklore Society

岩手県文化芸術振興審議会委員(～現在)

岩手県文化財保護審議会委員(～現在)

花巻市文化財保護審議会委員(～現在)

#### 受賞

1991年11月 第11回日本民俗学会研究奨励賞(日本民俗学会)

2007年10月 第1回本田安次賞(民俗芸能学会)

■メッセージ あらゆるパフォーマンスは演者と観客を内在しており、両者が相互に交渉することによって不断に変化していきます。こうした「見る/見られる」関係、およびその社会的かつ政治的な意味について、日本やマーシャル諸島における儀礼・演劇・博物館などをとりあげながら調査研究しています。また、同様の視座に依拠しながら、東北文学にも接近したいと考えています。宮沢賢治は「農民芸術概論綱要」において、「誰もみな芸術家たる感受をなせ 個性の優れる方面に於て各々止むなき表現をなせ 然もめいめいそのときどきの芸術家である」といっています。こうした姿勢を共有することによって、私たちじしんの芸術的な表現を一緒に生み出しましょう。

## ■ 2. 橋本裕之「民俗芸能研究という神話」、『民俗芸能研究という神話』森話社、2006年、p.5-p.19

(初出: 民俗芸能研究会/第一民俗芸能学会編『課題としての民俗芸能研究』、ひつじ書房、一九九三年十月)

### ◇ 1 はじめに

「可能態としての民俗芸能研究」の構想 p.5

⇒現場至上主義による調査報告書という「宛て先のない手紙」

民俗芸能の現地調査によって未発の主題を主題化する

### ◇ 2 現地調査という場から

Ex. 王の舞の調査 福井県美浜町に伝わる中世に始まる芸能 p.7

眼前の光景を所与のものとしてせず、どうして今日でも存在しているのか、という疑惑を持つ

→美浜に若者が多いことの遠因には、原子力発電所がもたらす経済効果があった  
→歴史的な民俗芸能と、それを成り立たせている今日の条件をいかに記述するか

Ex. 壬生の花田植の調査 広島県千代田町に伝わる重要無形民俗文化財（現在、無形文化遺産）

元は農業に近い芸能だったが、農業技術の革新にも関わらず、文化財指定のため古態を維持せざるを得ない  
→当事者の関心は、農業技術ではなく、いかに舞台でこの芸能を上演するかに向けられる

→「こうした位相におこそ文化財という制度を無化する、いわば現場の論理」 p.8

→こうした皮肉かつ逆説的な事態が数多くあるにもかかわらず、「民俗芸能」を調査／記述する試みは、先見的にどこかしら予定調和的な響きを奏でている」 p.8 →民俗芸能研究そのものを問い直す必要

### ◇3 民俗芸能研究の思想史

「民俗芸能」は自明のものではない

- ・「あくまで「現在」に規定されており、能や歌舞伎に比肩しうるような一定の形式や内容を含意していない」
- ・「この術後は戦後に誕生した学術用語の一種であり、そこにはあらかじめさまざまなイデオロギーがたたみこまれている。「始源」「古風」「伝統」「素朴」……。」 p.9

→「今日の「民俗芸能」は近代化の過程をも含む社会の構造的な変動にさらされているため、もはや前傾したイデオロギー群からすっかり乖離してしまっている」

→今日の民俗芸能研究における必須の課題は、「民俗芸能研究じたいを脱一神話化して、未発の主題を主題化する試み」を行うこと。

### ◇4 未発の主題を主題化するために

民俗芸能が近代化により変化しているといっても、「民俗芸能」を近代化という紋きり型の表現に還元してしまうのはあまりにも不十分である。対象の変化を近代化の所産としてのみ理解する短絡は、もうひとつのイデオロギー群を前提するという陥穽に落ち込む結果しか呼びよせないはずである。」 p.11

→「未発の主題はむしろ「民俗芸能」を調査／記述する方法の可能性を模索する過程で浮かびあがる「近代」や「現在」にまつわる諸問題として主題化されて然るべきであった。」

新しい主題への取り組み方の例

- (1) 「民俗芸能」にまつわる釈義の付置連関を分析する、いわば解釈学的方法の可能性
- (2) 「民俗芸能」にまつわる美的価値の構成を分析する、いわば「民俗美学」的方法の可能性
- (3) 「民俗芸能」にまつわる進呈技術とその習得過程を記述する、いわば民俗誌的方法の可能性

### ◇5 再び、現地調査という場へ p.12

・調査対象を民俗芸能からストリップへ

←近代に消滅していった「民俗芸能」を、「古風」という視点ではなく、「近代」に規定された同時代に生きる芸能として扱うのと、同じ視点。

「可能態としての民俗芸能研究」を共有する試み

かくして平成三年（一九九一）一月、民俗芸能研究会／第一民俗芸能学会（通称「第一」）が電撃的に発足する。会則も会費もない、きまった会員もない、「正しい民俗芸能研究」をめざすべく発足した、いわば「開かれた討議」〔7〕を実現する場である。「第一」は活動する期間をあらかじめ二年間に限定して、月に一度の研究会を継続してきた。世話人の立場にあった人間として、一言いわせてもらいたい。二十三回の研究会は民俗芸能研究のみならず、多種多様な分野から多数の参加者を得て、当初の予想を凌駕するすぐれた成果を多々あげたものと自負している。ともかく最も初期にかかげた理念を紹介する。

今後「民俗芸能研究会」は、民俗芸能研究の退廃を憂える有志一同によって、過日にわかに設立された「第一民俗芸能学会」を母体とし、その多方面にわたる活動の橋頭堡として、ひそかに開催されることになった。そこでは、前回に合意に達した事項、すなわちこれまでの民俗芸能研究の成果を批判的な読みの水準に連れ出す作業を基軸としながらも、さらにそれぞれの関心にもとづいた研究発表および討議を断続的に繰り返すことが試みられるであろう。その結果、民俗芸能研究を豊かな可能性へと開いてゆくための手がかりを獲得することができれば、多少のお行儀の悪きなんぞ、別にどうでもよいことなのである。これは断言しておく。なお、本会への参加は、あくまで個人の責任においてのみなされることを強く希望する。したがって、いわゆる学校的世界観を持ちこもうとする者は、本会の理念に照らして退去を命じられることがあるので、くれぐれも注意されたい

→平成四年（一九九二）十二月、総決算として開催したシンポジウム「民俗芸能研究の現在」で自爆  
→現地調査という場から生じた問いかけ、現地調査という場へ回帰する問いかけ

## ◇6 おわりに

### 成果としての『課題としての民俗芸能研究』

第1部。初期の民俗芸能研究を思想史的課題として受けとめて、その方法を批判的に検討しようとしている。「民俗芸能」を囲繞するさまざまな状況が激変した今日、先人たちの業績がわれわれにどのような意義を持ちうるのかを明らかにしたい。

第2部。われわれの言説じたいを解釈しなおして、その認識論的前提を根底から相対化することは必須の課題である。これは民俗芸能研究の存立基盤を問いなおす試みであり、われわれの言説にひそむ陥穽を暴き出すことにもつながる。ここから新しい民俗芸能研究の可能性が開かれてくるはずである。

第3部。個々の「民俗芸能」が生まれてくる、あるいは語られる状況に注目しながら、われわれが民俗芸能研究を語り出そうとするさいに直面する諸問題について、具体的な調査研究にそくして考察する。

第4部。「民俗芸能」を規定する諸前提のうちでも、とりわけ重要である「近代」もしくは「現在」とあげて、議論の俎上にのせようとしている。日常的な実践の形式としてある「近代」や「現在」が「民俗芸能」にどのような関係を強制しているのか、また、民俗芸能研究じたいにどのような視座を保証していたのかを自覚的に捉えなおしたい。

→未発の主題を主題化する方法ははじまったばかり